

---

## Student an assassin 一章

にゃんこ先生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Student an assassin 一章

### 【Nコード】

N9348X

### 【作者名】

にゃんこ先生

### 【あらすじ】

Student an assassinがやっと本編までいき  
ました

本編というよりはプロローグと本編の中間的存在です

## 嘘×本当×情報

青年は血まみれの服のまま、とある商店街に入ってしまった。

この商店街は真夜中にめったに人が出歩くことはない。通り魔がいるという噂も最近たっているらしいが、ここには街灯が全くないので危険だというのが本当の理由だ。

さらに市民の安全を維持するハズの騎士団でさえも日が落ちるまでに商店街のパトロールを終わらせ、夜間に来ることはない。そのこともあって青年は血まみれの服装でも人に見られることなく出歩ける。

そんな商店街の中、血まみれの青年はどこにでも有りそうな喫茶店に入ってしまった。

少年 「恭子さん、今帰りましたよ。はいこれ情報料。また情報頼んます」

青年はそう言って何百万という金の入った封筒を投げ渡した。それをしかめっ面で見ているのは、中にいる一人の女性。

恭子と呼ばれている彼女は不機嫌そうに、

恭子 「遅かったわねタクト。というか…この私をこんだけ待たせるなんていい度胸してるじゃない」

黒い笑みで、眉間にシワをよせながらタクトを睨みつけ、そういった。

タクト 「あの貴族の情報くれたの恭子さんだろ…。あんな警備のすごい家じゃあ時間かかるに決まってるでしょうが。」

…じゃあ遅れたお詫びに晩飯何かつくりますよ。それでいいですか？」

恭子 「それでいいのよ。んじゃ早くつくりなさい」

タクト 「着替えてくるから待ってて下さい。にしてもここ喫茶店何だから自分で何か作ればいいのに…」

恭子 「だってタクトの方が料理うまいでしょ。んじゃよろしく」

自分で作る気は全く無いという意志を示すかのように、サッサと喫茶店のイスにもたれる彼女を見て、タクトは少々ため息をつく。

タクト 「……全く…こうしているとたまに恭子さんがフィクサー（情報屋）ってこと忘れそうだ…」

恭子 「何か言った？」

タクト 「いえ何も」

タクトは恭子の黒い笑顔を見ると、即座に返事をした。

どうやら二人の関係は、情報を『売る者』と『買う者』らしいが、今の二人の間にある空気は、他人から見れば仲のいい姉弟としか思えない。

それにしても今のタクトは暗殺の時とはまったく表情が違い、すごい気さくで優しそうな人柄に見える。

あの時の冷酷な瞳をした人間とは、まるで別人のようだ。

タクト 「出来ましたよ」

そういつてタクトは湯気がゆらゆらとたっているサイダーチャーハンを、恭子の前にゴトンと置いた。

恭子はそれを見て、真っ先に手前にあったレンゲをとると、

恭子 「それじゃあ頂きま〜す!!」

パクッ

タクト 「ん〜おいし〜!!さすがはタクトよね〜!そこらの料理とは一段違っわ〜!」

恭子はそれだけ口にする、女性とは思えないほどの速さでチャーハンをおおばっていく。

タクト 「そんな焦らなくても…ゆっくり食べればいいでしょ?この前もそうやって食べてたら、すぐに喉詰まらせただしょうが」

恭子 「大丈夫よ。そんなベタな事にはならないわ」

タクト 「確か前もそう言って…」

恭子 「ンッー！ンッッー！」

タクト 「ハア…やっぱり…」

タクトは苦笑しながら息が詰まって苦しそうにしている恭子の背中をさすった。

少し呆れ気味な表情でのその行動だが、恭子を気遣っているのは確かだ。

端から見れば仲のいい兄弟としか思えない光景である。

恭子 「ふ〜おいしかった！

…んじゃ次の情報売るわよ」

恭子は食べ終わると、食べ散らかした食器に目もくれず、急に真剣な顔になってそう言った。

タクト 「またですか？そろそろ俺も自分の目的を果たしたいんですけどねえ…」

恭子 「今度は本当に重要な情報よ。その分情報料は高くつくけどね」

タクトはそれを聞くと、ため息をつきながら、

タクト 「ハア…その言葉前にも聞いた覚えがあるんですけど…。大体恭子さんも俺の目的は知ってるでしょ…。」

確かに世の中の犯罪者たちを殺すのも俺の目的の一つですよ。でも…」

タクト 「次の情報は…あなたの…復讐の相手のことについてよ」

恭子はタクトの言葉を遮ってそう言った。

タクト 「……………どういう意味ですか……………？」

恭子 「そのままの意味よ」

一瞬の空気の硬直の後、静かに言葉が交互する。

タクト 「本当……………に……………！？見つかったん……………ですか！？」

タクトは恭子に震えている声で恐る恐る聞く。

それをみて少し焦る恭子だが、

恭子 「まあ……………情報料はとるけど……………どうするの！？」

タクトはその言葉に反応したのか瞬時に恭子の胸ぐらを掴みながら言い放った。

タクト 「やりますよ……………やるに決まってる……………俺はそいつに……………復讐するためだけに、俺はこの十年間を生きてきたんだ」

タクトは胸ぐらを掴む力をどんどん強くしていく。  
人を苦しめるには十分な力で。

恭子 「……………ちょっと……………わかった……………から……………苦し……………い……………！分かったから離しなさい……………」

タクトはその時、狂気に満ちた目で恭子を睨んでいた。その冷酷非情なタクトの顔には、さっきまで笑っていたタクトの面影は見当たらない。

恭子の言葉を聞き、タクトは自分がしている行動に気づき、気を静めてから鈴に話しかけた。

タクト 「…にしても何で今ごろそいつの情報が出て来たんですか？ 10年間探し続けても全く情報が見つからなかったんでしょう？」

恭子 「そう…問題はそこなの」

恭子は刑事のようにタクトに指を突きつけながら告げる。

恭子 「そこが変なのよ。10年も前の情報が何で今ごろ転がりこんできたのか…私にも分からない。…畏の可能性もある」

恭子は自身の髪の毛を触りながら、苦い表情でタクトにそう告げる。しばらくの沈黙が流れた後……

タクト 「それでも俺は…」

恭子 「…やるんでしょう？ そのために今まで生きてきたんだもんね」

タクト 「……………はい」

タクトは決意に満ちた表情で、恭子をしっかりと瞳にとらえながら返事を返した。



恭子 「…わかった。で、その情報何だけど… あなたの復讐相手の息子が、今年私立武神高校に入学している。情報はこれだけよ。その人の名字や名前も分からないわ」

タクト 「……………は！？情報って…それだけ！？」

恭子のその言葉に対し、タクトは鳩が豆鉄砲をくらったかのような顔をしている。

恭子 「そう。それだけ。後は自分で調べなさい がんばって」

恭子はいつの間にかいつもの調子に戻っている。

タクトに怯えていた時の面影が今では全くない。

タクトに怯えていた時の面影が今では全くない。

タクト 「それだけでどうやって調べると！？大体情報収集は俺より恭子さんの専門でしょ！？」

恭子 「いやあく私もパソコンで調べてみたけどセキュリティが固いし。ハッキングしようとしてもプログラムに妨害されるみたい。まあそういうわけだし後はあなたに任せるわ」

タクト 「…恭子さんに出来ないのに俺にどうしろと！？」

恭子 「鈍いわね〜！やり方を変えるの！つまり…」

恭子はそこで言葉をきって続きの言葉を言った。

恭子 「タクトが武神高校に入学して調べればいいのよ」  
タクト 「……………」

タクトは驚きと困惑で完全に固まってしまっている。

恭子 「…というわけで入学準備とかは私がやっつくわ。校長の許可は取っておくから安心して。まあ明後日くらいには転校って形で入ると思うし」

タクト 「…ちょっと待って…下さい…その方法しか本当じゃないんですか!?!」

タクトはやつと口を開けるようになったらしく冷や汗をたらしながらそう言った。

見た目から嫌そうだとわかる。だが恭子は

恭子 「だって生徒でもないのに学校のまわり調べてたら怪しまれちゃうし…しかも学校内まで調べられるようにするにはやっぱりこの方法が一番なのよ〜!アツハツハツハ!」

恭子は悪魔のような笑みを浮かべてそう言った。

タクトが目を離したすきに恭子は大量の酒を飲んでいて、顔も赤くなっている。

タクト 「でも確かあの高校って平民は入れないんじゃない?」

恭子 「大丈夫よ。タクトの貴族証明書ちゃんと作っておくから。勿論偽造だけどね」

もはや悪魔とも言える笑みでそう言い切った。  
偽造だと言うのにこの堂々とした態度は一体どこからくるのだろうか。

タクト 「いや、でも俺学校とか行ったことありませんよ!? 勉強なんて中学生までの範囲を恭子さんに教わったことくらいしかありませんし…」

恭子 「そこは問題ないわ。あなたは元々、高い学習能力があったから中学校と偽って大学の勉強教えといたから。何より中学校の勉強から教えるの面倒だったしね」

タクト 「(面倒って…通りで中学生なのに難しい勉強だと思った…というか俺気づくの遅いな…)でも武神高校って確か私立ですよね!? お金俺全然持ってませんし…」

恭子 「お金は私が出してあげるから大丈夫!」

タクトは小さなこえで

(いつもドけちのクセにこんな時だけ何言ってるんだ!)

恭子 「何か言った!？」

タクト 「いや何も…(地獄耳だな…)それより恭子さんに迷惑が…」

恭子 「あんたが生まれてきた時点で迷惑かけてるから大丈夫!」

タクトは心の中で

(ひでえ…しかもフォローになつてねえ…)と呟いた

タクト 「でもあまりに急展開すぎて…」

ああいえばこういう。

そんな止めようのない会話の連続に呆れながら、タクトは静かにため息をつく。

だが、酔っている彼女がそんなことに気を使うはずもない。

恭子 「つべこべうるさい！

とにかく明後日学校だからね！

それと身分を聞かれたら必ず下級貴族と答えなさいよ！  
平民って答えるとバレちゃうし！」

タクト 「ちよっ…！」

恭子 「んじゃ明後日よろしくね」

タクトの言い分も聞かず、恭子は一気にそれだけ伝えたと、喫茶店から乱暴にタクトを蹴りだした。

タクト 「痛つて…乱暴に放り出しやがつて…というか飯つくらせといてこの扱いは無いだろ…変わらねえなーあの人も。

というか俺が学校…ねえ…想像つかねえな。

…まあいいか。さっさとアイツを探し出して…必ず殺してやる。  
俺が受けた苦しみを…何倍にもして返してやる！

それで学校なんかからも…さっさとおさらばだ」

そんな決意を一人改めながら、タクトは帰路についた。

恭子 「あの子にも…信じられる友達がいれば…少しは変われるの  
かもね」

恭子は座り、酒を飲み干しそう呟っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9348x/>

---

Student an assassin 一章

2011年10月26日01時00分発行